

## 現代に蘇った『緋文字』の「森」

—— 映画『ダンサー・イン・ザ・ダーク』における「夜の航海」 ——

### “Forest” in *The Scarlet Letter* Seen in Our Times

—— ‘The night-sea journey’ in a Danish movie *Dancer in the Dark* ——

高 島 まり子  
Mariko TAKASHIMA

#### <序> 「個性化過程」としての「夜の航海」の重要性

英雄の死と再生を描く太陽神話の下半円を C.G. ユングは「夜の航海」<sup>1</sup> (night-sea journey) と呼び、自我が無意識の深みに下降し、死を経た後に無意識から新たな心的エネルギーを供給されて意識面に再生するまでの精神的再生過程を象徴する元型と考えた。この過程は意識と無意識の統合を目指す、ユングの言うところの「個性化過程」<sup>2</sup> の象徴的表現の一つでもあり、様々なイニシエーションに死と再生の儀式として組込まれてもいる。私はホーソン作『緋文字』にこの元型的過程を見出すが<sup>3</sup>、時空を超えた普遍的な元型であれば21世紀の現代にも見出されるはずだ。なぜ今「夜の航海」に拘るのかを説明し、この精神的再生過程の表出を媒介にホーソンと現代を結んでみたい。

一見「普通の子」だった少年による凄惨な犯罪、頻発する児童虐待、特に問題もないように見える家庭での親子や夫婦の間の凄まじい暴力。このような現代日本の殺伐とした状況の原因を、躰の欠落や特殊な狂気で片付けることはもはやできまい。最近では家庭や学校の荒廃に加え、心に潜む攻撃性の自覚不足や攻撃性の制御に関わる認識と訓練の欠如が指摘されることも多い。しかし、これほど激しい暴力の爆発に至るまで攻撃性を無意識層に溜め込み、自他共にその危険性に気付かずきたとしたら、それは何故か？

心理学的には、2つの理由が考えられよう。第1に普遍的要因として、科学の発達による機械文明の隆盛と知性偏重が、より根本的にはそれをもたらした極端な父権的文化<sup>4</sup> が、攻撃性を含む人間の本能的情動を蔑み無意識層に封じ込めようとするため、情動を日常の許容範囲において実際に体感、統合、制御することが困難になったことだ。その結果、情動は危険なまでに蓄積され、抑圧が綻びた時の反動は大きい。ユングはこのメカニズムをドイツ国民に対するキリスト教の影響の中に見てとり、ナチズム解釈の中心に置いた。(『元型論』59-62, 『ユング思想の真髄』143-5) E.ノイマンも、これを父権的文化の到達する人格分裂の危機と憂え、意識と無意識を繋ぐ元型イメージの活性化の意義を訴えた。(『意識の起源史』700)

第2は個別的要因で、戦争、災害、虐待等の様々なトラウマの後遺症としての PTSD (Post Traumatic

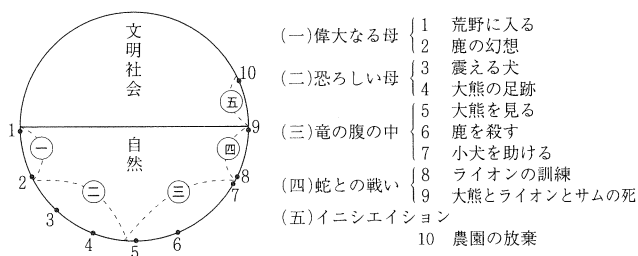
Stress Disorder: 「心的外傷後ストレス性障害」) である。「キレル」青少年や我が子を虐待する親に関係が深いのは、ヒットラーを被虐待児として分析したアリス・ミラー (『魂の殺人』185-255) が論じたところの大人の精神的、肉体的虐待による子供の PTSD であろう。この後遺症の内、暴力的なものには自殺や自傷行為などの自罰的なものと、自己と虐待者を同一視し他者を破壊することで過去の惨めな自己像を消そうとする攻撃的衝動とがあるという。いずれにせよ、無力な子供は生き延びるために暴力への怒りや虐待の記憶すら無意識層に抑圧することが多く、秘められたトラウマは攻撃的衝動という後遺症に形を変えて無差別な暴力の爆発や虐待の連鎖を生むことになりやすい。

1と2は(時代と個人というレベルの違いはあれ、密接な相互関係を持つであろうことは想像に難くない)、共に意識と無意識の分断によって人格を破壊する。このことは、既述した「キレル若者」現象や無差別な衝動的暴力の爆発の問題を抱える日本にとって、意識と無意識を結ぶ「夜の航海」が殊に重要であることを示すのみならず、人類が自身の絶滅を可能にする兵器を所有し、遺伝子操作によって生命創造の領域をも侵そうとしている現在、偏った人格の誤った判断によって地球の未来を破壊しないために、この精神的再生過程がもたらす意識と無意識の統合が全人類にとってこれまでになく重要であることを示唆している。

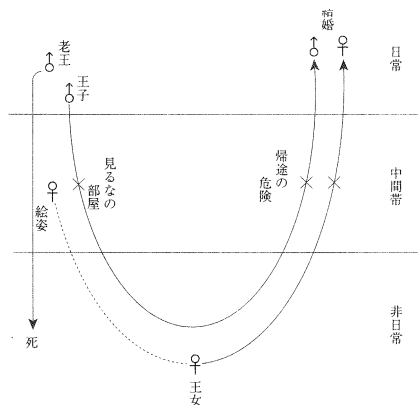
さて、「夜の航海」において英雄の「怪物退治」に重点を置き、無意識を退治されるべきものとして否定的に捉える場合 (『意識の起源史』233) と、「無意識に住む竜が守り所有している宝を自分のパーソナリティーに統合する」(ノイマン『アモールとプシケー』148) 点を重視し、無意識を「宝」を宿すものとして肯定的に捉える場合がある。ノイマンによれば、英雄神話における「怪物退治」——否定的な「父母」元型に対する「父殺し」「母殺し」の象徴——と偉大な父性的、あるいは母性的な存在との絆——肯定的な「父母」元型の意識面への統合の象徴——は、自我確立を象徴する英雄の「竜との戦い」の必須要件である。『意識の起源史』において、人類の——ひいては個体発生として繰り返されることになる各個人の——意識発達過程(特に、無意識から切断された西洋的自我の確立に至る過程)を神話に見られる元型的諸段階を組み合わせて定義したノイマンは、意識の母胎である無意識の混沌を「原父」と「原母」に分離して(「原両親の分離」)その支配圏から一応の離脱を達成した「息子=自我」が、更にその各々を否定面と肯定面とに解体し、前者を「父殺し」と「母殺し」によって克服し、後者を自らに統合する過程を、神話に登場する英雄の「竜との戦い」に見出し、「竜退治」(「怪物退治」)の成功を——「竜退治」の後に続く、アニマを象徴する囚われの「乙女」との結婚と「宝」の獲得(アニマの統合による全体性の回復と創造性の獲得と同義)まで含めて——自我確立の象徴と考えた。ノイマンにおける「父」元型はその時代の文化的価値規範を、「母」元型は無意識を各々象徴するので、「父殺し」とは生命力の枯渇した抑圧的な古い価値体系の破壊であり、「母殺し」とは意識の制御を超える本能の猛威の克服を主として意味している。またノイマンは『女性の深層』において、女性の自我確立は、元型的には男性英雄(アニムス)の「竜退治」による無意識からの救出と、彼との父権制結婚によるアニムスの統合によって達成されると述べたが、彼が『アモールとプシケー』において分析したプシケーのような女性英雄の場合は、それとは少し異なる過程を辿る。彼女は自ら「原両親の分離」を為し遂げ、更に「冥界下り」において集合的無意識層に潜む「宝」(元型的生命力)を獲得し、意識的な自己犠牲によって恋人エロース(アニムス)の「竜退治」を促すのだ。いわば女性英雄の「夜の航海」における「宝」

の獲得,あるいは「宝」との一体化が先行し,アニムスを先導して「竜退治」を為し遂げた後,彼との結婚と出産に象徴される「宝」の獲得の意識化に至る過程が,プシケーの自我確立を象徴している。そして,これはヘスターの歩んだ道にも当てはまると言えよう。したがって女性の場合も男性の場合も,「個性化過程」を象徴する「夜の航海」において新たな自我を再生させる過程である後半は,以上のようなノイマンの説における英雄の「竜退治」と「宝」の獲得の要素を含むことになると考えられる。その際に,前者を重視すれば無意識の否定面が,後者を重視すれば無意識の肯定面が,各々強調されるのである。

元田脩一氏は男性主人公による「宝」の獲得に注目し,集合的無意識を肯定的に捉える視点をフォークナー作『熊』の批評に用い(『エデンの探求』,85-174),アイクの体験を精神的再生過程の象徴的表現と解した。次に元田氏が図解・分析したアイクの精神的再生過程と,それに酷似した元型的構造を持つ昔話「忠臣ヨハネス」の河合隼雄氏による解釈から,人物移動図とを引用する。



＜図1＞『熊』におけるアイクの「夜の航海」  
(『エデンの探求』100)



＜図2＞「忠臣ヨハネス」の人物移動図  
(『昔話と日本人の心』27)

ノイマンは同様の視点から,『アモールとプシケー』のプシケーの「冥界下り」に無意識の肯定面が強調されている「夜の航海」を見出したが,私見によれば既に述べたように,『緋文字』のヘスターとディムズデイルの森での会見にはプシケーの「冥界下り」と重なる意味も読み取れる。とすれば,19世紀のホーソーンにも20世紀のフォークナーにも,人類の元型的再生過程が表われていると言えよう。

さて,現代の新たな「夜の航海」を待望んでいたところ,60年代米国を舞台にチェコ移民女性の愛ゆえの自己犠牲を描いた映画『ダンサー・イン・ザ・ダーク』にそれを見出して感動した。しかも,『緋文字』や『熊』では主人公の空間移動によって表現されていた心理的な旅を,ヒロインの白昼夢を示すミュージカル場面を用いて日常に効果的に描き出したことも衝撃的だった。あらすじを述べ,『緋文字』と比較しつつヒロインの「夜の航海」を辿り,ホーソーン的な「個性化過程」が現代の我々にとって持つ意味を考えてみたい。

### ＜ I ＞ 白昼夢①②を中心に

チェコから一人息子と共に米国に移住してきた女性セルマ<sup>6</sup>は、失明寸前であることも、遺伝性の失明から息子を救うため手術費を貯めていることも隠し、工場で重労働の毎日。親切な家主の警官ビルに経済的困窮を打ち明けられ、同情した彼女が自分の秘密を打ち明けたことが悲劇を生む。彼女の貯金を盗んだビルは、取り戻そうとした彼女ともみ合う内に自分の銃の暴発で重傷を負ったあげく、貯金が欲しければ自分を殺すようにと彼女に迫る。追詰められた彼女は遂に彼を殺し、取り戻した貯金で息子の手術を予約した後に逮捕され、死刑の宣告を受ける。秘密を探り出した親友の説得で一旦は再審請求した彼女だが、息子の手術費が新たな弁護費用に回されると知るや再審請求を取り下げ、手術の成功を知らされた直後に刑が執行される。

以上の作品の構成自体が、『緋文字』におけるヘスターとディムズデルの森と共同体との往復を中心とした部分によく似た象徴性を帯びているように思われる。また、セルマの白昼夢を描くミュージカル場面のほとんどは現実と非現実が融合した世界を描いており、ホーソーンのいわゆる「中立地帯」の可視的表現と考えられるのではなかろうか。これらの2点に注目して、セルマの「夜の航海」を考察したい。まず、主人公の「日常」と「非日常」、両者の間の「中間帯」の3つのトポスを象徴する空間は、『緋文字』においては共同体と森、両者の間の私的空間に設定され、『熊』においては共同体と荒野の神秘的な奥地、その中間のキャンプ地である。しかしこの映画では、3つのトポスはそれほど固定的ではなく、その空間がセルマとビルの秘密に関与する度合いによって区別される。秘密が一切入り込まない「日常」、秘密だけで成り立ち、彼らが「日常」のペルソナを捨て去ってしまう「非日常」、そして以上の2層をつなぐ役割を果たす層で、秘密を共有しているものの彼らの「日常」と「非日常」のペルソナがいまだに溶け合っている「中間帯」である。むしろ「日常」は工場を中心とした下町、「非日常」は彼らの住む郊外から病院のある森の中を中心に成り立つといった緩やかな空間の設定はあるが、セルマ達の住居に秘密を知らない友人達との和やかな「日常」が侵入したり、「中間帯」が下町や住居に設定されたり、同じビルの家も一階は「日常」か「中間帯」、二階の彼の部屋は「非日常」の世界となる、といった具合にプロットの進展に伴っても変化する。

まず2人が秘密を共有した時点で「現実」は重層的になる。金持ちで妻と仲睦まじく、頼りになる警官というビルの像に、浪費家の妻に見捨てられることを恐れる破産寸前の気弱な男の像が重なり、小柄で弱く貧乏なセルマの中に、小金を貯め、失明の危機にも動じない意志の強い女性の顔が覗く。『緋文字』の2人が共同体の知らない彼らだけの秘密を読者と共有するように、セルマとビルは他の登場人物から隠された2人だけの現実を観客と共有することになり、秘密を守る誓いによって、この深層の現実には、作品の「日常」から遊離して一人歩きを始めるのだ。ここで「日常」あるいは「現実」の世界を意識、それとは相容れない「非日常」あるいは「非現実」の世界を無意識、または想像の世界と読み替えれば、彼ら2人のこの深層の現実には「現実のものと想像のものが一緒になり、それぞれに相手の性質がしみこんでくるような」(ホーソーン『緋文字』刈田元司訳14) 両者が溶け合う領域、いわばホーソーンの「中立地帯」の様相を呈するのだ。やがてセルマがビルの借金の申し込みを断ると、金持ちと貧乏人、保護者と被保護者、強者と弱者といった「現実」での2人の関係は徐々に揺らぎ始め、「中立地帯」

の「非現実」性は更に深まる。

次に白昼夢に注目すると、失明寸前の疲れ切ったセルマが、最初の白昼夢①では工場の仲間達全員と楽しげに力強く歌い、踊る。不自由な目という肉体的限界や過労、貧困等の悲惨な現実には埋もれている彼女の豊かな生命力や人間愛、生きる歓喜が躍動する画面に弾けるのだ。白昼夢の内容は、彼女がエネルギーギッシュに動き回れる点では「現実」とは言えないが、場所、時間、登場人物や人間関係（特に親友キャシーとの友情）もすべて「現実」の枠組みに収まっており、「現実」の工場での労働を否定する姿勢もない。セルマの内奥に潜んでいる生命力が「現実」に対して反応し、「現実」の枠組みの中での望ましい可能性を提示しているという意味では、全くの「非現実」でもない。即ち、両者が溶け合う「中立地帯」の可視的表現と考えられるが、かなり「現実」に近いものと言えよう。ユングは無意識の内容が意識面に表出したものとして夢や白昼夢を重視した。彼の考えを説明して河合氏は、夢は「その時の意識に対応する無意識の状態が何らかの心象によって表現した自画像」であり、「意識と無意識の相互作用の結果」であって、夢の分析においては「意識と無意識の相補性という点が非常に大切」と述べる。（『ユング心理学入門』146-8）ここで、やはり「現実」を意識、「非現実」を無意識と読み替えば、セルマの白昼夢は「非現実」（無意識）が「現実」（意識）を補って、その時点での彼女の心の全体性を回復しようとしたものと考えられる。とすれば、これはユングの言うところの意識と無意識を合わせた心の中心たる「自己」が両者を統合しようとする「自己実現」、あるいは「個性化」の試みの一つの表われとも言えよう。むしろ白昼夢である以上、いまだ試みに留まっていて、無意識の内容は完全に意識化されたわけではないし、「現実」世界に統合されたわけでもない。『緋文字』のヘスターとディムズデルも、「中立地帯」で白昼夢を見る。秘密の罪を抱いたまま自室で苦行する彼の目に、幻影のように映るヘスター母娘の姿。しかも、パールは緋文字をつけた母の胸を指さした小さな指で彼の胸を指すのだ。ヘスターも自宅でパールと向き合う2人だけの生活で、唯一の宝であるはずの娘の不可解な性質に悪魔との関連性を夢想し、娘の瞳にチリングワスや悪魔の顔を見て呆然としたり、共同体の体制や女性の社会的な立場に疑問を持ち、アン・ハッチンソンのような予言者になる運命を夢想することもあった。これらも「現実」と「非現実」の融合であると同時に、「中立地帯」において彼らの「自己」が自我に訴える内容であり、一種の「自己実現」への呼びかけとも言えそうである。

ところで、セルマの白昼夢が「自己実現」の試みの一種であるとしても、視力の低下に伴って素人ミュージカルの主役を断念せざるを得なくなったあげくに作業ミスゆえに解雇されるという具合に、彼女の「現実」は白昼夢とは逆に悲惨さを増していく。このような「現実」基盤の喪失は、ヘスターが罪の発覚によって共同体での居場所を失い、共同体の価値体系に疑念を持ち始め、娘を含めた女性の未来に絶望し、遂には恋人の精神的危機に直面して苦悩するといった経緯を連想させる。これら2つの流れは共に、彼女達が意識的価値体系から離反して「中立地帯」へと追い込まれ、更に無意識層へと接近していく過程を象徴すると考えられるからだ。解雇されたセルマは、僅かに資金不足ではあるものの、やむなく息子の手術の予約を医師に頼み込む決意を固め、線路伝いにとぼとぼ歩いて帰宅する。その途中、後でジェフに病院に送ってもらう約束を交わしながら、彼女は白昼夢②を見る。眼鏡を捨てて颯爽と汽車に乗る彼女は、健康な人間が老境に至るまでの平凡で幸福な人生の一こま一こまを時空を超えてパノラマのように眼前にし、強い憧憬の念を抱きながらもそれらを断念し、人間の真実を「見る」のは「現実」

の目ではなく時空を超える魂の眼であることを力強く謳いあげる。「自分がどんな人間か解ったし、どんな人間になっていくのかも解ってる。すべてが見えたから、もうこれ以上（「現実」で）見るものはない」と。「男が親友に殺されるのを、たくさんの命が人生の途上で失われたのを見たわ」という彼女の歌詞に、1968年に旧ソ連がチェコスロバキアに侵攻した前後の歴史的背景を読み込めば、チェコ移民の彼女が当時の米国の「日常」では想像もつかない過酷な「非日常」をどれほど見てきたか推測できる。そして白昼夢から醒めた彼女は、ジェフの「（目が）見えないのか？」といううめきにも似た問いかけに「ちゃんと見えるわ」と呟くのだ。彼女の意識は平凡な幸福を失明ゆえに手の届かないものとして諦めながらも、彼女の無意識は失明を超越し、真に「見る」ということがどうということか、人間の真実を「見る」のは「現実」の目ではなく魂の眼であることを訴えるのだ。

こうして、彼女が崩壊していく「日常」・「現実」世界から貯金で息子の手術を実現するという秘密の中核、即ち「非現実」の中心に向かうことが暗示される。物理的な視力を持った生が「現実」世界での生命を象徴するとすれば、それを失っていくにしたがって彼女は魂の目でものを見る異次元の生命を獲得し、「非現実」世界——「冥界」——へと旅立つのだとも言えよう。「現実」における喪失の積み重ねは「非現実」の豊かさへの接近と同義であり、白昼夢②の中の彼女は自在に冥界の扉を開け得る力と神秘的な視力を備えた巫女を思わせる。ここでもまた、白昼夢は失明という「現実」と神秘的な視力の獲得という「非現実」が二重写しになった「中立地帯」を描き出す。しかし白昼夢①と比較すると、「現実」基盤の喪失の積み重ねのゆえに「現実」の平凡な幸福への断念が強く打ち出され、それだけ「非現実」的な視力の神秘性が強調されて、彼女が無意識層により接近していることが解るのだ。

ヘスターもまた「現実」基盤を喪失するにつれて、「慈悲の修道女」としての弱者への献身的な奉仕によって緋文字が“Able”の意味に解釈されるほどの強く暖かい女性的な力を身につけ、冥界に通じる聖なる力さえ備えているとみなされるに至った。緋文字が“Adultery”（姦通）か“Adulteress”（姦婦）を意味し、彼女が墮落した女性であるとする共同体の公的見解の「現実」の裏側に、「もう一つの現実」が新たに張り付いたのである。しかしながら、共同体の関知しない個人的空間（「中立地帯」）における彼女は、パールを養育するかたわらヨーロッパの新思想に共鳴し、共同体の神権体制を覆すアン・ハッチンソンのような卓越した予言者と自分を同一視するような夢に耽っていたのである。共同体の「もう一つの現実」は、そのようなヘスターの秘められた夢が、彼女と価値観の対立する共同体で身につけた新たなペルソナであり、「中立地帯」における一種の「自己実現」傾向の反映であったと言える。その彼女にも似た神秘的な力を備えたセルマを、汽車は「中立地帯」を横断して「非現実」へと運ぶかのようだ。ヘスターは神秘的な森に出かけてデイズデイルと会うが、そのような「非現実」的空間はフロンティアの消滅した現代には存在しない。白昼夢②は、崩壊していく「現実」から「非現実」へとセルマと観客を誘うのに非常に有効な役割を果たしていると言える。

## ＜Ⅱ＞ ビル殺害と白昼夢③

こうして帰宅したセルマを待ち受けていたのは、「現実」において、また「中立地帯」においてすら隠されていたビルルの最も暗い「影」<sup>7</sup>——彼女の貯金を盗む行為——であった。彼女は息子のために貯

金を取り戻そうとして彼を殺してしまうが、この事件の意味は、単に母性愛ゆえの意図に反する殺人の悲劇に留まらない。まず注目すべきは、ビルの裏切りが彼の人物像の反転を含む2人の関係性の完全な逆転であり、彼の殺害は彼女を支える価値体系の逆転を含む「現実」の最終的崩壊であることだ。生計の手段である仕事、唯一の心の支えたるミュージカルを演じる趣味、ビル夫妻の友情といった一連の「現実」世界の価値の喪失も、息子の手術代を賄う貯金という「非現実」に隠された価値さえ守られればセルマは耐えることができた。しかし、手術費を奪って息子の未来を破壊しようとする存在に対しては、彼女はいかなる犠牲を払っても戦わざるを得なかった。息子の未来が危機に瀕した決定的瞬間、彼女の中で本能的な母性愛が法や宗教的道德を凌駕したのだ。貯金を取り戻すために殺人を犯した彼女は、激しい「太母」<sup>8</sup>的な情動によって「現実」を支える父権的規範に反逆したのであり、これは父権的文化に対する元型的「父殺し」と言えよう。

また2人の秘密の世界である「中立地帯」において既に二重性を帯びていたビルの像は、セルマの失明につけこんで手術費を盗み、それを取り戻そうとした彼女に逆に盗みの罪を着せて銃で脅す行為によって「現実」から完全に反転する。貧しい母子に住居を与え、暖かく面倒をみる父親のような保護者から破壊的な虐待者——「恐ろしい父」<sup>9</sup>——へ、「法の番人」から犯罪者へ、そして最後には彼女が自分を殺すまで貯金を離さないというエゴイストへと。（殺してくれるようにと彼女にすがりつく「息子」への変容については、後述する。）彼女のビル殺害は、個人的な「恐ろしい父」という最も暗い「影」を露わにした彼に対する個人的「父殺し」でもある。2人の力関係も「日常」から徐々に逆転していたが、彼の破壊的行為によって負の方向に再逆転し、彼女が彼を殺すことによっていわば再再逆転し、彼女の圧倒的な優位に終わる。

更に、「法の番人」たるビルは、「現実」では優しく逞しい個人的「父」であったと同時に、社会的な「父」としての米国の象徴とも考えられる。ここにセルマの背景を読み込むことは、重要な手掛りを与えてくれる。旧ソ連によるチェコスロバキアへの軍事的侵攻と弾圧は「プラハの春」と呼ばれた自由への第一歩を押し潰した。彼女にとって米国への移住は、強大な「恐ろしい父」たるソ連から理想的「父」の庇護のもとへの逃亡であったはずだ。映画の初めの部分で、彼女はビル夫妻にキャンディをご馳走になりながら言う。「（チェコにいた頃に見た映画の中で、こんなキャンディを食べる場面を見て）アメリカって、なんてステキな国なんだろうって思ったの」と。またビルに自分の秘密を漏らした時、米国に来たのは「（息子）ジーンに目の手術を受けさせられるから」と説明する。貧しい移民のセルマにとって、米国は息子を救う進歩した医学と物質的豊かさ、自由・平等の精神を体現する理想的「父」であった。しかし、「現実」の米国で彼女を待っていたのは、低賃金で酷使される工場での重労働の日々だった。それでも彼女は不平一つこぼさず貧困と目の不自由に耐え、体力の限界まで内職も増やして手術代を貯金し続け、学校をさぼった息子をぶって「勉強するのよ。学校で勉強することが何よりも大切なの。」と登校を迫る。即ち、貧富の差を拡大し、弱者を更に社会の周縁に追いやる資本主義経済の負の部分に耐え、なお米国的な独立独歩の自由主義的価値体系を基盤に、息子に社会的サバイバルのための教育を押しつけてきたのだ。しかし彼女の視力が弱るにつれて、この「父」は弱者（障害者）を救済せず、逆に追放（彼女の解雇）、搾取する（彼女の失明につけこんだビルの盗み）冷酷な姿を現わす。彼女は息子のために警官であるビルを殺すことによって、結果的に「父」米国の否定的な「影」——国家的な

「恐ろしい父」——に対する社会的「父殺し」をも為し遂げるのだ。このようにビル殺害は、「現実」のペルソナの反転を含む人間関係の逆転と、「太母」的な情動による個人的・社会的・元型的な3種のレベルの「父殺し」による「現実」の価値体系の逆転を意味することが明らかになった。この「現実」を裏返した世界は「現実」の衾<sup>9</sup>、即ち「非現実」に他ならない。そして、2人のペルソナの完全な破壊と「太母」や「父殺し」のような元型的イメージの表出から、彼女の自我が意識層から「中立地帯」を越えて集合的無意識層へと回帰し、いわば「冥界」にまで下ったことが見てとれるのである。

『緋文字』の2人も、このような「現実」世界の価値体系の逆転や「現実」の人物像の反転と力関係の逆転を「森」で体験した。まず、ビルの盗みの発覚は、ヘスターによるチリングワスの正体の告白に当たると思われる。セルマ達の場合とは逆の構図で、ヘスターの裏切りの発覚は「現実」での彼女のペルソナを破壊し、チリングワスにペルソナの欺瞞性を見破られていたことを知ったディムズデイルもまた、自らのペルソナの崩壊を悟り、隠されていた悪魔的な「影」を一瞬露呈して倒れてしまう。彼のペルソナの死は「古い衣服のように脱捨てた自分」というイメージに、彼女のそれは倒れた彼の側に身を投出した姿に暗示されるのだ。更に彼女は彼を心身の衰弱と空虚な苦悩から救うために、自らの7年間の苦難によって得た共同体での新たなペルソナと共に共同体の価値規範と共同体の神をも捨て去る。彼もまた彼女にすぎり、彼女の説得に応じて「現実」を捨てる決意をする。古いペルソナに代わるものとして、彼女は悔悟した罪の女から新たな神の価値基準を雄弁に説く説教師へ、更には禁欲的な「慈悲の修道女」から官能的な美女へと反転し、雄弁な牧師ディムズデイルは受動的に彼女の説教に従い、とたんに衰弱した肉体は生命力を回復する。同時に彼らの力関係も、共同体の優秀な後継者たる牧師と共同体の最下層に位置する罪の女から、「太母」の如く力強い女性と彼女に先導される無力な「息子＝愛人」<sup>10</sup>の関係へと逆転するのだ。「森」で「現実」のネガである「非現実」の最深部に到達した2人の愛の確認と共同体からの逃亡の決意は、集合的無意識層の「太母」のもとへの回帰であり元型的生命力の回復であると同時に、「現実」の意識的・父権的価値の否定であり、共同体とその神に対する「父殺し」と考えられる。

さて、厳密に言うとセルマのビル殺害の意味はもう一つある。というのは、それが直接的にはビルに対する「父殺し」であるにもかかわらず、逆説的ながら「息子」としての彼の救済にも通じるのではないかと思われるからだ。重要な点は彼女が憎悪から彼を殺したのではないということである。彼女への凄まじいまでの裏切り行為にも拘らず、負傷した彼は「勇気がなくてできなかったことを君がしてくれたんだ。…殺してくれ！友達だろう？思いやりを示してくれ。」と哀願し、彼女も号泣しながら手を下す。ここでの彼は、自らの暗い「影」に圧倒されながらもそれをはみ出し、生殺与奪の力を持つ「母」セルマに無力な「息子」の如くすぎりつく。それ以前の「中立地帯」において、彼女は苦しい「現実」に行詰って自殺願望を口にする彼を気遣い、心から励ましてきた。その過程で、以前の「現実」の「父」—「娘」関係は徐々に「母」—「息子」関係を内包しつつあったのだが、「非現実」においてそれは決定的となる。彼は、光と闇を併せ持つ両義的な父親像に「息子」の相をも包含する男性の全体性へと回帰し、彼女は彼の苦悩を分かち合い、生死を司る冥界の女神たる「太母」さながら、絶望した彼の求めに応じて死を与え、再生へと導くかのようだ。これは彼を否定することではなく、彼を苦悩から解放し、彼が「現実」では統合できなかった光と闇の分裂を死によって統合へと導くことだったのではないか。



それゆえ裁判で彼女が答えたように、彼を殺したのは「彼に頼まれた」からだったというのは、一面の真実なのである。

死が苦悩からの解放と再生をもたらしたかのように、白昼夢③で彼は蘇り、セルマと和解し、2人は仲良くダンスする。この白昼夢は、上述のビル殺害の光の半面を可視化し、彼女の内なる「太母」の創造性を明示するものと言えよう。むしろ、「父殺し」は本質的に息子ジーンを守り彼の再生を保証するための行為であるがゆえに、その意味で死をもたらす破壊的な闇と生をもたらす光が最初から表裏一体となったものだが、ビルに視点を置いた場合にも同じことが考えられるのだ。この光（創造力）と闇（破壊力）を併せ持つ全体性としての「太母」的リビドーこそ、集合的無意識層の「宝」（『意識の起源史』290-296, 『エデンの探求』91-93, 河合雄雄『昔話と日本人の心』26-28）であり、この「宝」に到達して彼女の「夜の航海」の前半は真に完結したと言えよう。そして彼女がこの「宝」を「現実」に持ち帰るには、肯定的な「父母」元型に支えられて「太母」の否定面に対する「母殺し」を為し遂げ、「太母」の元型的生命力を「現実」に受け入れられる形で組込んだ新たな自我となって、「現実」に再生しなければならない。即ち、「太母」との一体化は「父殺し」のみに終わるのではなく、まずは肯定的な「父」の再生に直結せねばならないのだ。優しいビルの復活と2人の和解は、こういった意味での「父」の再生への第一歩と言えよう。ディムズデイルの逃亡の決意が「父殺し」のみに終わらず、「太母」ヘスターによる「母の息子」——未来の新たな「父」へと成長する心的基盤——としての彼の再生（生命力の回復）をも伴ったように。

これに関連してセルマ達の場合と『緋文字』を比較すると、ビル殺害が象徴する「現実」の価値体系に対する元型的「父殺し」は、ヘスターの場合は胸の緋文字を投げ捨てる行為に象徴される。「過去はなくなったのです。…この印ともども、そんなものはかなぐり捨てて、無かったも同然にしてみせます！」（八木敏雄訳294）という言葉と共に、共同体による罰の印を投げ捨てる彼女は、「現実」のピューリタン神権体制の価値規範を真っ向から否定し、破壊する。しかも、これは共同体への「父殺し」に留まらず、共同体の優秀な後継者たるディムズデイルの殺害と同義でもあるのだ。既にチリングワスの正体を知らされた時点で、彼に心の内奥を覗かれたことを悟ったディムズデイルは、聖なる牧師という「現実」世界におけるペルソナを破壊されたのだが、ヘスターが緋文字を捨てる行為は、彼が立脚していた「現実」基盤そのものを破壊して彼の「死」を完全なものにするのであるから。

そして「もう一つの衝動」によって、彼女が堅苦しい帽子を脱いで豊かな黒髪を解き艶やかに微笑むと、薄暗く重苦しかった森が日光の降り注ぐエデンの如き楽園と化す。戦闘的なアテナを思わせるヘスターの共同体批判とディムズデイルへの叱咤激励といった激しい対決と戦いの雰囲気が一変し、乙女の頃の希望を取り戻し、優美なペルセポネーへと変身したかのようなヘスターに導かれ、甘美な愛と和合の世界が開ける場面である。これは、彼らが集合的無意識の最深部に到達し、生命の根源たる「太母」のもとに回帰したことを象徴しており、セルマの凄絶な殺人の場面が白昼夢③において柔らかい蘇生と癒しへと反転する箇所に対応する。ホーソーンが、実は森は相変わらず暗かったのかもしれないが、愛ゆえにヘスター達の目には光に満ち溢れたエデンに変わったのだと暗示するように、これは彼らの白昼夢といっても差し支えあるまい。ビルがセルマの白昼夢の中で死から蘇ったように、逃亡を決意したディムズデイルも新たな生命力を得て活気付く。「わたしは…生まれ変わり、新たな力を得て、慈悲深い神

の栄光を称えるために、立ち上がることになったらしい！」(294)という彼の言葉は、「太母」的世界における彼の復活を示しており、彼らはセルマ達と同様に甘美な一体感を味わうのだ。ここでディムズデイルが獲得したりビドーは、「現実」のピューリタンの価値体系から見れば異端であろうが、あらゆる文化価値がそこから生まれ育っていく土壌(母胎)の養分とも言える人間の基本的生命力であり、復活した彼自身はその土壌に播かれた新たな生命の種子とも考えられる。それが地中で腐るか、健康に育って地上に発芽するかは、この時点では未知数であり、プロットの展開に委ねられているのではなかろうか。

したがってセルマの白昼夢③は、「非現実」における「父殺し」の破壊的な一面を「父」の再生の第一歩という創造的な半面によって補い、彼女の内なる「太母」の全体性を描き出す役割を果たしている。ゆえに、この白昼夢は「現実」を「非現実」によって補っていた①②とは異なり、「現実」と「非現実」の溶け合う「中立地帯」の可視的表現とは言えない。これは、死者が蘇り、加害者と被害者が抱き合い、夫を殺された妻が殺人犯を優しく逃がし、破局の危機にあった夫婦が愛に包まれる、といった「非現実」そのものの極致を描いている。というのも、セルマが工場の「現実」に位置しているながら「非現実」の信号を受け止めて生み出した白昼夢①や、彼女がミュージカルの主演を断念し、工場を解雇されて「現実」基盤を失い、「非現実」へと向かうトポスとしての「中立地帯」に位置していた白昼夢②と違い、白昼夢③では彼女は「非現実」の殺害現場に位置し、彼女の自我は集合的無意識の深層に下降して「太母」と一体化しているからだ。しかし、その状況における自我の一面性を補完して彼女に「太母」の全体性を体験せしめたという意味では、これもまた白昼夢①②と同様に心全体の中心たる「自己」による「自己実現」の試みの一つと考えられるのではなかろうか。

ここで、この作品の「中立地帯」の二つの性質を整理しておこう。一つは作品のプロットに直接組込まれたセルマとビルだけが秘密を共有するトポスで、「現実」の背後にある深層の世界である。しかしながら同時に、彼らにも全く意識されていなかった彼ら自身の「影」が「現実」のペルソナに取って代わる「非現実」世界とも違い、「現実」の意識や関係性を引きずった世界でもある。この「中立地帯」の延長線上に、「日常」の意識の及ばない集合的無意識層、即ち「現実」が反転した「非現実」世界が存在するのだ。もう一つはセルマの白昼夢(白昼夢③以外の)で、彼女の「自己」が意識と無意識の統合である「自己実現」を志向して生み出した世界であって、その内容はミュージカルの一場面であり、作品のプロットの因果関係からは独立して存在する。しかし、当然この二つは無関係ではない。白昼夢はそれ自体、「非現実」の存在とその意味を豊かに描いてセルマの心の全体性を可視化すると共に、彼女の自我が「現実」層(意識)と「非現実」層(集合的無意識)、そして両者を繋ぐトポスとしての「中立地帯」のどの地点に位置するかをその内容によって示唆し、彼女の心の旅の進み具合を示す道標としての役割を果たしているのではないかと思われるからだ。それによって観客は、彼女の内的世界を推し量り、プロット上に彼女の「夜の航海」を辿ることができるのである。

### <Ⅲ> 白昼夢④～⑥を中心に

さて、「父殺し」を為し遂げたセルマが「現実」に帰還するには、肯定的「父」の内的統合に加え、内なる「太母」の否定面の克服(「母殺し」と肯定面の統合によってアニムスと結びつき、「宝」を

「現実」に持ち帰ることが必要である。既に述べたように、「個性化過程」を象徴する「夜の航海」において新たな自我を再生させる過程である後半は、ノイマンの説における英雄の「竜との戦い」をも含むため、セルマの自我再生を象徴する「現実」への帰還にも、「竜との戦い」の要件が組込まれるのは当然だからである。ところで男性にとっては、自我は神話における「息子」なる存在そのものに象徴されるがゆえに、——ノイマンによれば、無意識の中に徐々に意識性が強まり自我の胚芽が生じてくると、それまでの「太母」像から意識を象徴する男性性が分離し、母と彼女に寄り添う幼児、あるいは少年の像が現れてくるという。([『意識の起源史』94-5, 石田英一郎『桃太郎の母』, 河合隼雄『母性社会日本の病理』210-2)——自我確立のためには「父母」元型像の支配力からの独立が最重要課題である。一方、女性にとっては「父母」元型との関わりに表わされる「原両親」問題と共に、彼女を無意識から解放してくれる男性英雄の役割を果たす恋人(伴侶)や未来の男性英雄に成長すべき息子が、無意識内に潜む男性性たるアニムスのイメージの担い手として、自我確立において重要な意味を持つ。また、アニムスの元型像は、すべての女性が歴史的に経験してきた男性的なものの蓄積を反映しており、父親、兄弟、息子、恋人、神等のイメージによって表象されるが、アニムスの再生が中心テーマになる場合は、息子のイメージが活性化されるのは当然であろう。ノイマンは「女性にとっては、聖なる男の子の誕生は彼女のアニムス精神の再生と神化を意味している」([『アモールとプシケー』163)と述べる。プシケーの物語は恋人エロースとの関係が中心であり、ヘスターにとっても同じくディムズデルとの関係が最大の問題であったが、彼女の場合は彼が恋人であると同時に「息子なるもの」をも象徴していることを見逃してはならない。セルマの場合は恋人は登場せず、中心テーマは専ら「息子なるもの」(息子ジーンのみならず、ビル的一面も含めて)との関係と、「父なるもの」(彼女自身にとっての父と息子ジーンにとっての父親代理を含めて)との関係である。ジェフが微かに恋人の要素を内包しているが、聖母マリアにとってのヨセフの如く、息子の父親代理としての意味の方が大きく感じられる。以上のような視点から、息子ジーンの手術の予約は、未来の「現実」における男性英雄へ、更には肯定的な意識的価値体系を象徴する父性原理へと成長すべき「息子」なる存在、即ちアニムスの再生につながるものとして、彼女の自我再生に重要な意味を持つのである。

また、新たな視力を備えた息子を生み出す準備という意味では、「非現実」における彼女の象徴的懐胎であり、新たな肯定的母としての彼女の「現実」への帰還を推し進める役割をも果たすと考えられる。いずれにせよ、息子ジーンへの愛が彼女を意識面に再生させるのだ。ビル殺害の後、白昼夢③の中で彼女をジェフとの待ち合わせ場所に導いたのが自転車に乗ったジーンであったことも、それを裏付けるかのようだ。白昼夢から醒めてジェフの車に乗せてもらった彼女は、車から降りると病院に行く途中の湖で手を洗い、血で汚れたバッグ(お金が入っていた)を投げ捨てるが、それは小枝に引っ掛かって後に殺人の証拠として回収される。彼女は息子の手術の予約を済ませ、またこの湖を通過して町に戻るのだが、この湖は、集合的無意識層の底に存在し、「冥界」への下降と「現実」への上昇を分かつ境界線の象徴とも考えられる。なぜならば、ビルを殺して取り戻したがゆえに殺人と等価の罪の印となった貯金——本来は息子の再生を願う母性愛と等価であったが——を、息子の「目」に変容させて「現実」における彼の再生を実現する行為である手術は、この湖を渡らなければ予約することができないからだ。即ち、手術の予約は「太母」性による殺人を「息子なるもの」の再生へと変容させる、死から生へのリビドー

変換の開始を意味するのであり、それが湖を渡る行為に象徴されているのである。彼女は、息子への愛ゆえに湖を渡って「冥界」からの上昇のスタートを切ったと考えられる。しかもその行為は、彼女が一旦捨てたもう一つの罪の印——彼女の有罪を立証する手掛かりとなる血痕のついたバッグ——の発見をもたらすことによって、「太母」的な殺人の負の意味をも「現実」に持ち帰ることを余儀なくさせ、彼女を「母殺し」に直面させることになるのだ。

ヘスターの場合、同様の役割を果たすのは娘パールへの母性愛である。彼女は、緋文字と帽子を捨てて集合的無意識層の「太母」圏に復帰した母に再びそれらを着用させ、ディムズデイルとの原初的絆を内包したままの母を共同体に帰還させる力を持つのだ。更に、パールの抵抗を受け入れた時、元型的生命力と意識的な愛が結びつき、ヘスターは両者の統合の可能性としての「娘」（未来の自我）を新たに懐胎し、「夜の航海」の後半への第一歩を踏み出したと言えよう。この象徴的懐胎の場面も、セルマと共通性が見られる。ヘスターが小川のせせらぎに投げ捨てた緋文字は流れの途中でひっかかってしまい、パールの抵抗によって彼女はそれを再び拾って胸につける。機嫌を直したパールは小川を飛越えて母のもとに戻るのだが、母子の分断の解消という結果に注目すれば、それはヘスターが小川を渡ったのと同義である。即ち彼女は、ディムズデイルへの「太母」的な愛ゆえに捨てた罪の印を娘への愛に導かれて再着用することによって、小川を渡ることができたのだ。つまり、緋文字を一旦はずしたために「現実」の価値体系の重圧を一層明確に意識し、同時にそれを凌駕する個人的・意識的な母性愛の強さをも再認識したうえで、「太母」的生命力の謳歌の中に見失おうとしていた両者を意識的に再び我が身に引き受けたと言えよう。ヘスターの場合もセルマと同様に、「冥界」の最深部の水（小川）を渡るとは一旦回復した「太母」性を意識性によって変容させるリビドー変換を象徴しており、「非現実」（「冥界」）への下降から「現実」への上昇に転じたことを意味するのだ。これは、集合的無意識層の「太母」的生命力を「現実」の意識的価値体系の中に持ち込む第一歩と言えようが、セルマのバッグが発見されたように、ヘスターの「太母」性の回復も船旅へのチリングワスの同乗予約という形で、彼に察知されたことが判明し、彼女は「太母」の否定面との対決をも余儀なくされることになる。

それはさておき、パールの母への抵抗は母の自我の死を意識面での再生につなげるが、父ディムズデイルへの抵抗（キスを小川の水で洗い流す）もまた同様の意味を持つのではないと思われる。それは彼の心の奥深くにひっかかり、自宅への帰途の共同体の人々との出会いにおける自らの「影」の投影の引戻しの契機となり、遂にはチリングワスとの再会における神意への覚醒（自らの「自己」の認識）に結実したであろうことは、罪を告白した後の「さあ、くちづけしておくれ。あの森のなかでは、してくれなかったけれども！でも、いまなら、してくれますね？」（八木訳372）というディムズデイルのパールへの言葉と、実際それに応じて涙と共に彼に与えられる彼女のキスによって推測されるからだ。この展開は、森で彼女が洗い流した父のキスがここで初めて喜んで彼女に受入れられたに等しいことを示す。彼女の抵抗は既に無効となり、森で父と娘を隔てていた小川は象徴的には消滅したと言えよう。即ち、彼もまた小川を渡ったことが、ここで立証されたのである。（ディムズデイルの「夜の航海」後半の分析については、拙論6, 7を参照されたい。）

さて、セルマの逮捕と裁判はディムズデイルの共同体の人々との出会いと同様の意味を持ち、彼女を「非現実」から「中立地帯」を経て「現実」に連れ戻すと共に、彼女の内なる否定的「母」を克服し、

肯定的「父母」を内的に統合するための試練でもある。(『緋文字』の場合、「夜の航海」の後半にはヘスターがデイズデイルの後景に退き、彼らの自我再生への道程は、直接的には彼に委ねられている。)まず、セルマが病院から帰宅する途中で立ち寄ったミュージカルの練習場で、以前は彼女を「僕のマリア」と慈しんでくれた演出家の通報で警官達が駆けつけ、彼女を逮捕する。映画の冒頭での練習場面とは対照的に、「現実」における彼女の愛すべきペルソナが、殺人の発覚によって冷酷な殺人者へと一変していることが解る。ここに「現実」の人々の視線を描きこむことによって、プロットはビル殺害と白昼夢③を最深点とする「非現実」から、セルマが忌まわしい殺人犯と神秘的な「太母」の2つのアイデンティティを重層的に生きる「中立地帯」へと進むのだ。しかし、彼女はいまだ自らの殺人の破壊的側面に対応しきれないまま、他者の思惑にも気付かずにリハーサルの楽しさに我を忘れ、いつしか白昼夢④に浸っていた。警官の到着までの時間を稼ごうとする演出家の意図で作られ出された「現実」のリハーサルを、彼女の内なる「非現実」の「太母」的な生命力と他者との一体感への希求が、和気あいあいとした楽しいミュージカルに変えてしまったのだ。この白昼夢もまた「現実」と「非現実」の融合が可視化された一片の「中立地帯」であるが、それが彼女の逮捕で終わることは、彼女がプロット上の「中立地帯」の更に「現実」に近い方向へと引戻されたことを示す。同時にそれは、「太母」的な生命力という「非現実」世界の「宝」がそのままの形では「現実」に持ちこめないことをも象徴している。

続く裁判において、「現実」の父権的価値体系と彼女の内なる「非現実」の「太母」性は真っ向から衝突せざるを得ない。「非現実」において成し遂げられた象徴的「父殺し」は、ここで「現実」の「父」との対決によってその有効性を試され、「現実」にふさわしい形に鍛えあげられるのだと言えよう。米国の法と国家権力を代表する検事は、彼女を「現実」の視点から一方的に非難する。「あなたは住居を与え、息子の面倒をみてくれ、彼に誕生日のプレゼントさえしてくれた寛大な友人の金を盗み、残虐に彼を殺した」と。「現実」におけるビルの光の半面のみを自らの似姿と位置付ける米国には、内なる「影」の自覚はなく、彼女を残虐な殺人犯として徹底的に糾弾する。この「父」米国の言葉は、ヘスターを淫らな姦婦として裁く共同体の偏狭な視線そのものだ。独善的な正義の光に照らし出された一面的「現実」しか見ない父権的意識と、「影」を含む全体性が立ち現れる「非現実」、あるいは集合的無意識の間には無限の断絶がある。ここで、「現実」に隠されている「父」なる米国社会の「影」について言及したい。

既に考察したように、ソ連の圧制を逃れて60年代米国に移住したセルマにとって、米国は自由と豊かさを体現する「父」であった。しかし、「現実」の過酷さと理想とのギャップに追い詰められ、「富を分かち合うことは良いことだと思うわ」と周囲に何気なく漏らしたのも無理はない。検事は証人の一人が証言した彼女のこの一言を重視し、共産圏から米国に紛れ込んだ魔女を見るような鋭い視線で彼女を見る。そして、居並ぶ陪審員達の恐怖と嫌悪の表情がその視線を共有することを示す時、観客は容易に彼女の運命を予想し得るのだ。「太母」的な生命の平等を志向する感覚を表わす言葉も、父権的なイデオロギーの眼鏡を通して見ると大きく歪曲されてしまう。ここには明らかに、アーサー・ミラー作『るつぽ』に描かれた魔女裁判の——更に、その隠喩にこめられたマッカーシズムによる「赤狩り」の——アナロジーが見て取れる。セルマの「父」米国の独善性には、「魔女狩り」のイメージに包まれたマッカーシズムの過激さの「影」がちらつく。そして、『るつぽ』の題材となったセイラムの「魔女狩り」——祖先が深く関わったことから、ホーソーンが常に重圧を感じていたと思われる——のアナロジーは、

『緋文字』の前置きたる「税関」に事件が批判的に言及されていることから明らかなように、ヘスターの物語にもはっきりと読み取れるのだ。ヒビズ女史が魔女として登場するのみならず、ヘスター自身も独善的な共同体に断罪され、最下層で孤立し、心底ではヨーロッパの自由思想を受入れ、(セルマより過激な形ではあるが)社会改革を望んでいた。即ち、体制内の異分子であり、限りなく魔女と同一視されやすい存在だったのである。現にヒビズ女史は彼女を森に誘ったこともあり、森でのディムズデイルとの会見後の新事就任祝賀の日には、彼女に森の出来事をなれなれしく仄めかすのだ。仮にディムズデイルの「竜退治」を経た告白が為し逃げられず、彼らが森での「太母」的な価値体系に従って逃亡を実行に移そうとして発覚し、裁判で「父殺し」の正当性のみを一方的に主張したならば、ヘスターは共同体を批判し、その「息子」たるディムズデイルを墮落させた(象徴的には殺害した)かどで、今度こそ魔女として処刑されていたであろう。そうなれば、「父」たるピューリタン神権体制とその神に対する対決は、彼女の内なる「太母」の光の側面をも「現実」から葬り去る結果になり、パールも人間として誕生することなく「悪魔の娘」で終わったことだろう。

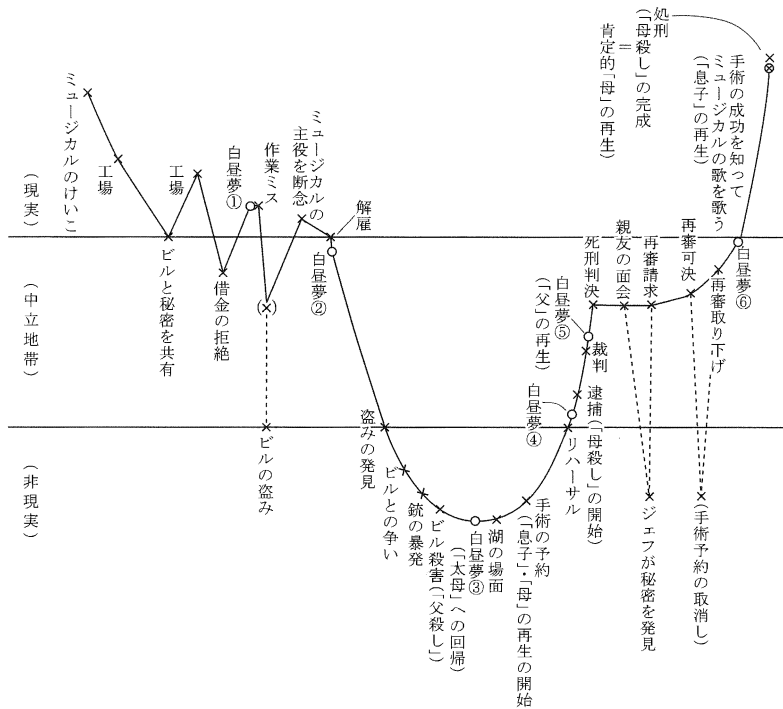
では、セルマの「父」との対決はどのようなものであったか。彼女は、「現実」の価値体系において不利になるにも拘らず、ビルの名誉のために彼の秘密を、また息子の未来のために息子の秘密を断固として守る。彼が破産の危機や妻に去られる恐怖からセルマの貯金を盗んだことも、銃で脅迫したことも、一言も証言せず、自らの正当性を一切主張しなかったことは、彼の苦悩に満ちた全体像への肯定的「太母」の受容を裏付ける。そして、今なおビルの善意への感謝を失わない彼女の姿は、殺人の動機に含まれる「太母」的情動の肯定面を指唆し、彼女がビルの光の半面をアニムス像に取り込んだことを示している。しかし「現実」に生きる人々の目にはそのような肯定面は見えず、魔女裁判の構図の中で検事が彼女に押しつけた現代的な魔女としてのペルソナ——危険なコミュニストであり、冷酷無比な殺人犯——が、一人歩きを始めるのだ。その結果、我々観客の目には「非現実」における彼女の「太母」性と「現実」の殺人犯としてのペルソナが二重写しとなった「中立地帯」が、そのまま存在し続けることになる。秘密の厳守は、彼女のビルと息子への愛情(「母」なるもの)による「現実」の法体系(「父」なるもの)への一種の挑戦とも考えられ、「現実」の父権的規範の密かな修正による「父」の再生の可能性を観客に提示したものとも考えられる。

この「父」の再生は、更に推進される。裁判の最中に、セルマがこれまで空想の中で父親の役割を与えてきた往年のミュージカル・スターであるチェコ移民、ノヴィ氏が証人として登場したのを契機に、白昼夢⑤が始まるのだ。彼女にとって彼は、明るく楽しいミュージカルを生み出す理想的「父」であり、白昼夢における彼の姿は肯定的な「父」の意識面への統合を進め、彼との暖かい連帯はビル亡き後を補うべき個人的、かつ精神的な父娘の絆を再生する。と同時に、敵対する原告や検察官すら含む法廷の全員との暖かな和合によって「現実」の父権的規範との絆を再生し、更には自分とノヴィ氏に象徴される移民と「父」米国の絆をも修復するのだ。こうして「現実」の裁判によってプロット上の「中立地帯」が維持されると同時に、白昼夢⑤の世界においても、セルマの「自己実現」の一種の試みとしての内なる「中立地帯」が生み出される。しかも、個人的にも社会的にも肯定的な「父」の再生を描いて「現実」の変革への強い希望が明示されている点で、彼女の自我が白昼夢④より「現実」に近い地点に位置していることが可視化されている。白昼夢から覚醒した彼女は死刑判決を受容するが、これは彼女自身の

「太母」性の否定面の克服であり、「母殺し」の一種と呼べよう。この「母殺し」は、刑の執行まで最愛の息子との面会を拒否する決意から再審請求の取り下げに至るまで一貫して遂行され、失明が子供に遺伝すると知りながら赤ん坊を抱きたいばかりに出産し、息子のために殺人まで犯した盲目的な母性愛を、より高い愛によって制御する意味を持ち、息子のために命を捨てることによって完成する。

こうしてセルマが到達した新たな母性の性質は、白昼夢⑥に明らかである。死刑執行室に向かう彼女は、廊下伝いに並ぶ独房の死刑囚全員を一人ずつ優しく癒し、聖母の如き輝きを放つ。これは、彼女が既に個人的母性を超え、悩める罪人すべてを庇護する聖母マリアの如き普遍的母性を獲得したことを象徴する。さすがに「現実」の処刑に直面した彼女は死の恐怖に取り乱すが、堪りかねた親友に息子の手術の成功を知らされると、視力の回復による息子の再生と彼の中での自身の精神的再生を確信し、初めて人々の見守る「現実」においてミュージカルの素晴らしさを高らかに歌うのだ。これはもはや白昼夢ではない本物のミュージカル、即ち「現実」における「自己実現」、あるいは「非現実」の「現実」への全き統合と言えよう。この対立物の統合は、集合的無意識層の「太母」の元型的生命力を意識的価値体系の中で聖母の如き母性愛に高め、まさにそれゆえ殺人犯として死刑を受入れざるを得ない彼女の逆説的な姿にしか具象化できない。デイズデイルが「神の子」を連想させる説教の直後に罪を告白して死に、ヘスターが後に自ら胸に緋文字をつけて悩める人々を支え、聖母の如く慕われたように。この逆説性は、意識と無意識という対立物の結合たる「自己」を実現する「個性化過程」の結果には、つきものと言えよう。

以上の考察を元田脩一氏や河合隼雄氏に倣って図式化すると、次のようになるとと思われる。



<図3> セルマのトポス間の移動

### ＜結び＞ セルマの物語と『緋文字』と我々の「現実」

セルマの「夜の航海」は、「太母」への回帰によって集合的無意識層の「宝」を獲得し、「父殺し」と「母殺し」の遂行と共に新たに肯定的な「父」と「母」を自らの内に統合することによって「宝」を「現実」に持ち帰る、即ち抱いた「宝」を変容させつつ自ら「現実」に再生し、その「宝」によって息子をも再生させる過程であった。息子を再生させる「目」は、既に考察してきた様々な変容と統合を経て彼女の生命と引き換えに彼が継承した「宝」であるがゆえに、物理的な視力とは異なり、再生（「現実」における死）に至るまでの彼女の「夜の航海」、即ち「個性化過程」の象徴とも考えられる。最近の日本におけるこのような女性の「夜の航海」と「息子」への「宝」の継承は、柳美里氏の『命』3部作に見出される。また、類似性が認められる女性の「個性化過程」の表出としては、大平光代氏の『だからあなたも生きぬいて』や飯島愛氏の『プラトニック・セックス』等が考えられるが、以上の全てが日本の文化的主流から逸脱した非エリートの悪戦苦闘物語（結果的に、ある種の成功を獲得したにせよ）であることは、セルマが失明しつつある貧しい移民であったことと合わせて注目に値する。時代のエリートとして「現実」の意識的な価値体系の主流に組み込まれた人間は、父権的意識の堅固な砦に内面を防衛されているうえ、挫折を知らない場合が多いだけ疑問を持ちにくく、自らの「影」に気付く可能性も低いのもかもしれない。そのような意味で、社会的弱者や挫折に悩む個人にこそ「現実」の価値体系（「父」なるもの）の欠陥や弱点が自らの無意識的情動と共に強く意識されるため、すべての人間に必要な精神的再生の可能性がより大きく開かれており、自らの体験を発信する意義も深いとも思われる。

ところで、我々の時代の映画作品と19世紀の『緋文字』に多くの共通点があることを考察してきたが、「夜の航海」を媒介にホーソーと現代を結んでみようとする本稿に着手した背景には、「キレる若者」現象等の暴力の噴出があった。このような現象に象徴される現代日本の病理に、どのような「夜の航海」が可能かを模索する意図があったのだが、とても結論めいたものには到達できなかった。既述したような体験談や類似の文学に触れるのも、一つの有効な刺激にはなろう。（本稿では男性の作者による作品を取り上げる余裕は無かった。）要は無意識的な情動を軽蔑、あるいは抑圧しすぎることなく、その内奥に潜む創造性を育むと同時に、非常につらい作業である場合が多いにせよ、自らの心の闇や「影」を認識し、意識に統合する努力を惜しまないことであろう。近年の心理学やカウンセリングの人氣も、そのような社会的認識の深まりを示していると思われる。また、生命の根源たる自然との交流や、心の問題に対応するための様々な自助グループにおける自己表現や相互受容のワーク、無意識の生命力と切り離せない身体を再発見するヨガや竹内敏晴氏<sup>11</sup>のレッスン、鳥山敏子氏の「賢治の学校」<sup>12</sup>の取り組み等も意味深いと考えられる。

さて、本稿を書き終えない内に私達の「現実」も米国同時多発テロによって予想外の急激な展開をみるようになった。無差別テロは決して許されぬ暴挙だが、その温床となった世界中の貧困・差別・抑圧・暴力に苦悩する多数の人々の絶望と反米感情を思う時、そして対する米国の過去の政治的・経済的・外交的歴史を無視した声高な正義の主張と強引なアフガン空爆を見る時、再び殺人犯セルマを徹底的に糾弾する検事の言葉を思い出す。そして「現実」におけるビルの光の半面のみを自らの似姿と位置付ける米国が、ヘスターを裁く偏狭で独善的な共同体と重なると同時に、自らを「限りなき正義」、あるいは



「不朽の自由」と定義する現在の米国とも重なってくる。その自己像は、あまりに光に満ちみちていて「影」がない。荒野を開拓して自由・平等な民主主義国家を建設した輝かしい歴史の裏に北米先住民への虐殺と収奪、黒人奴隷の売買と迫害、様々な人種差別の歴史があることは周知の事実である。建国以来、広島・長崎の原爆投下やベトナム戦争をも含めて「200回以上の対外出兵」（辺見庸「朝日新聞」2001・10・9「私の視点」）を繰り返した超大国に内なる「影」の自覚が欠ければ、その結果は想像を絶するものとなる。多様な価値観を許容する中で自らの「影」を統合しようとする努力の積み重ねこそが、真の米国の偉大さを創るであろう。17世紀のヘスターの背後にピューリタンの悪魔だけを見た共同体の父権的意識は、1960年代のセルマの背後に共産主義の脅威を、更に21世紀の現在、アフガニスタンに他の何よりもイスラム原理主義による狂信的なテロの脅威を見ている米国に、そのまま引き継がれているようだ。しかしながら、「なぜ、米国が攻撃されたのか」という根源的な問いを自らに執拗に問いかけることなくして、あるいは「なぜセルマがビルを殺さなければならなかったのか」、更には「なぜヘスターとディムズデルが愛し合い、共同体から逃亡しようとしたのか」を追求することなくして、米国の内なる「影」を認識することは不可能であろう。独善的な正義の光に照らし出された一面的「現実」しか見ない父権的意識と、「影」を含む全体性が立ち現れる「非現実」、あるいは集合的無意識の間にはやはり無限の断絶があるのだ。

現在の世界的危機に臨んでこの断絶を埋め、状況の全体性に立脚した有効な解決策を提示し得る国は、日本——第二次大戦において米国に敵対し、奇襲や自爆特攻を敢行し、アジアを蹂躪したあげくに無差別空爆から広島・長崎までを体験した日本、敗戦後は平和憲法のもとに「民主主義」を享受し、未曾有の復興を為し遂げ、西洋先進国の仲間入りを果たしながらも、曲がりなりにも文化的アイデンティティを保持してきた日本、以上の経緯から米国を始めとする西洋と自国の各々に内在する光と闇の総合的な統合を目指して困難な努力を重ねているとも言えそうな日本、そして幸いにもアラブ諸国と歴史的な負の関係がなく、宗教的にもキリスト教とイスラム教という一神教に対して多神教的な風土を持つがゆえに客観的なスタンスをとり得る日本——しかないと期待したのは、幻想に過ぎなかったようだ。<sup>13</sup>むしろ、戦後日本の「現実」に不完全ながらも構築された意識的価値体系における光と闇の統合が大きく揺すぶられ、私達は混沌としたエネルギーに満ちた集合的無意識の「森」へと再び下降し始めているのではなかろうか。とすれば、「キレる若者」のみならず、私達すべてがヘスターやディムズデル、そしてセルマのような苦悩を通して新たな光と闇の統合に到達する覚悟が必要となる。

---

 註
 

---

<sup>1</sup> 「夜の航海」:

\* C.G.Jung, *The Collected Works* Vol.8, 153, : "Every morning a divine hero is born from the sea and mounts the chariot of the sun. In the West a Great Mother awaits him, and he is devoured by her in the evening. In the belly of a dragon he traverses the depths of the midnight sea. After a frightful combat with the serpent of night he is born again in the morning."

\* エリッヒ・ノイマン『意識の起源史』233-4 : 「英雄が夕方、西方で夜の海一怪物に呑み込まれ、この子宮一空洞の内部でそこに現われる謂わば竜の分身と戦い、勝利を納める。そして東の空に勝利の新しい太陽として、〈不滅の太陽〉として再生する」という神話。ノイマンによれば、「英雄」の「竜との戦い」の元型の内でも最も

広く分布しているという。

- \* 河合隼雄『ユング心理学入門』187:「この神話に典型的に示されている死と再生のテーマは、英雄が一つの仕事を成就しなければならないときに、まず経験しなければならない苦難の体験としても表わされ、英雄が怪物に呑み込まれてしまって苦心する話となっても多く存在している。」
- \* 元田脩一『エデンの探求』85-91参照のこと。
- \* この元型的イメージの表出としては、プシケーの物語以外に古事記のイザナギの黄泉下り、オルフェウスの冥界下り、テセウスのアリアドネ救出、イアソンが大魚に呑み込まれた話、ヨナが鯨に呑み込まれた話、シュメール神話のイナンナの冥界下り等がある。
- <sup>2</sup> 「個性化過程」あるいは「自己実現の過程」:「無意識を意識に統合する」過程(ユング元型論』88)であり、換言すれば「もろもろの無意識の諸要素(元型)を意識化して統合し、それによって個性的な単位としての全体性を実現する(様々な部分が調和的に働くようになった状態)」(林道義『ユング思想の真髄』235)、あるいは「個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる」過程(河合隼雄『ユング心理学入門』220-221)である。その働きの中心となるのは「意識と無意識とを含んだ心の全体性の中心」たる「自己」である。(同)ノイマンは「人格の全体性の構築を目指す…<自己>の調整作用」を「中心志向」(『意識の起源史』678)と呼び、人生後半においてこの「中心志向」を意識化すること(704)、即ち「自我が自己意識化することこそ自我と自己の一体化であり、…個性化である」(678)と言う。
- <sup>3</sup> 拙論:拙論(1):ディムズデイルの精神的変貌——自我発達の元型的プロセスについて——鹿児島女子短期大学紀要 第26号,1991.  
拙論(2):ヘスターとプシケー——『緋文字』に潜む女性的心理発達のプロセス——鹿児島女子短期大学紀要第29号,1994.  
拙論(3):*The Scarlet Letter*におけるChillingworthの両義性——「悪魔」と「神の使者」——鹿児島女子短期大学紀要 第30号,1995.  
拙論(4):英雄神話『緋文字』の意味——執筆の私的要因と社会的要因——鹿児島女子短期大学紀要 第31号,1996.  
拙論(5):「自己」元型像としてのPearl——元型の対立と統合——鹿児島女子短期大学紀要 第33号,1998.  
拙論(6):『緋文字』に秘された新たな神話——女性性と男性性の統合——鹿児島女子短期大学紀要 第34号,1999.  
拙論(7):『緋文字』における「夜の航海」——ヘスターとディムズデイルの「個性化過程」——鹿児島女子短期大学紀要 第36号,2001.  
全て多少なりともヘスターとディムズデイルの「夜の航海」に関連性を持つが、(2)(6)(7)で重点的に論じた。
- <sup>4</sup> 父権的文化:ノイマンによれば「純粹にバハオーフェン的な意味での、精神-太陽-意識-自我の世界の支配、即ち男性優位の文化」(『意識の起源史』243)、「意識が無意識から解き放たれ、男性的な自我を中心に据えた意識系統が独立するとともに、無意識を抑圧する」文化(『女性の深層』38-39)を指し、無意識的、女性的な価値観と対立する。
- <sup>5</sup> 映画『ダンサー・イン・ザ・ダーク』:2000年カンヌ国際映画祭パルムドール(最高賞)と主演女優賞をダブル受賞したデンマーク映画。監督・脚本を担当したラース・フォン・トリアー(デンマーク)は、悲劇的な自己犠牲というテーマがこの作品と共通する『奇跡の海』で、既に1996年カンヌ映画祭審査員グランプリ等の多数の賞を受賞した世界的な監督である。主演・音楽を担当したビョーク(アイスランド)は、11才からプロとして活動する天才的な音楽家。当初この作品の音楽の作曲とプロデュースのみを担当する予定であったが、監督の熱烈な要請でヒロインを演じることを引き受け、理屈や理性でなく感覚と感情でセルマに成りきって素晴らしい成功をおさめた。

- <sup>6</sup> 主人公セルマを演じたのがビョークであることの意味：
- ①彼女がカリスマ的な才能を持つミュージシャンだという事実が非常に重要である。つまり、彼女が障害者の役を演じていても実際はスーパースターだということを観客が知っているために、映画の与える印象がより重層的で厚みを増している。映画における「現実」と「非現実」の重層性は、映画（ビョークが障害者セルマを演じている世界）と我々の「現実」（ビョークが豊かな感受性に恵まれた偉大なアーティストであるという、映画にとつての「非現実」）の重層性と呼応し、映画における「非現実」、即ちセルマが無意識の深層では豊かな愛や生命力、強い意志に恵まれた稀有な存在であるという設定を、非常に説得力あるものにしていく。
- ②更にビョークの個人的特性が挙げられよう。その偉大な才能と業績にも拘らず、彼女が非常に小柄で童顔であり、童女のように幼く純心な印象を与えることである。更に、それにも拘らず、セルマと同様に彼女が母親であることも重要だ。即ち、ビョーク自身がセルマ同様に外見の幼さ（弱さ）と内面の偉大さと成熟（強さ・複雑さ）という二重性を持つ人物であることが、①に加えてセルマの人物像の重層的な意味を余すところなく表現している。同時に、彼女の母でありながら童女のような清純さを持つ点は、セルマの母性の最終的な到達点としての聖母マリアをも連想させる。
- <sup>7</sup> 「影」：その個人によって生きられなかった半面。その個人が認容し難いとしている心的内容。（『ユング心理学入門』101-112）
- <sup>8</sup> 「太母」：自我が自らを無意識との同一状態から切り離し始め、幼児期から少年期の自我が無意識の圧倒的な支配下にある段階。この段階の自我は、良き母に寄り添う幼児シンボルから両義的な母への抵抗や「恐ろしい母」への反抗を試みる少年のシンボルによって象徴される。あるいは、この段階の「息子＝自我」を支配する、破壊と創造の二面性を持つ両義的な無意識を象徴する母なる存在としての「太母」元型像。（『意識の起源史』81-163）
- <sup>9</sup> 「恐ろしい父」：自我の発達史において、自我を圧倒する否定的な殺されるべき存在である「恐ろしい男性」の内、父権制の権威であり、「強力な古い法・古い宗教形態・古い道徳・古い社会」として登場する「恐ろしい精神父」と、もともと「太母」の支配下にある男性像で、父権制の時代に入ると父元型が投影された「破壊的、攻撃的怪物」である「恐ろしい地父」から成る。（『意識の起源史』255-267）
- <sup>10</sup> 「息子＝愛人」：まだ「太母」段階ではあるが自らの独自性を意識し始めた少年期の自我で、「太母」に産み出され、彼女の愛人となり、彼女に「愛され、殺され、葬られ、悲しまれ、再び産み返される」存在。「母に授精し、豊饒神の性格さえ持つが、実際には彼らは太母に連れ添う男根に過ぎず」美しさと愛らしさと自己愛的な性格が際立つという。（『意識の起源史』90-99）
- <sup>11</sup> 竹内敏晴氏：演出家。劇団ぶどうの会、代々木小劇場を経て竹内演劇研究所を開設。「からだとことばのレッスン」に基づく演劇創造、人間関係の気づきと変容、障害者療育に打ち込んでいる。
- <sup>12</sup> 「賢治の学校」：宮沢賢治の精神を基盤に子供達が元気で、天性の才能を伸ばしていける学校、実体験を通して世界に開かれた体を作り、子どもが自らチャレンジする意欲を引き出す学校を全国に作ることを中心に、人々の全人格的成長と生き生きとした地域、社会作りを目指す運動とその実践の場。
- <sup>13</sup> 日本は米国の国家戦略に全く同意する立場を公言し、テロ対策特別措置法を成立させ、軍事的支援のために戦後初めて自衛隊を海外に派遣した。理念的には米国と一体化したわけだが、アフガニスタン暫定政権発足後は緒方貞子前国連難民高等弁務官を首相特別代表に任命し、アフガン復興支援の国際会議を東京で実現させた。世界をリードする貢献として、一筋の希望とは言えよう。

## 引用・参考文献

- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*, Vol. II of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Roy Harvey Peace et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-78
- Neumann, Erich. *The Origins and History of Consciousness*. Princeton, N.J. : Princeton UP, 1954-1993
- Jung, C.G. *The Collected Works of C.G.Jung*, Vol.8, Translated by R.F.Hull, Princeton U.P., 1981.
- アリス・ミラー『魂の殺人』山下公子訳 (新曜社, 1996年)  
 —————『才能ある子のドラマ』山下公子訳 (新曜社, 1996年)  
 —————『禁じられた知』山下公子訳 (新曜社, 1996年)  
 —————『沈黙の壁を打ち砕く』山下公子訳 (新曜社, 1995年)
- 石田英一郎『桃太郎の母』(講談社, 1984年)
- ヴェレーナ・カースト『神話にみる愛のかたち』山中康裕監修 河崎佳子・北尾敬子訳 (創元社, 1994年)
- エリッヒ・ノイマン『意識の起源史』(上)(下) 林道義訳 (紀伊国屋書店, 1984年)  
 —————『アモールとプシケー』河合隼雄監修 玉谷直美・井上博継共訳  
 (紀伊国屋書店, 1989年)  
 —————『女性の深層』松代洋一・鎌田輝男共訳 (紀伊国屋書店, 1989)
- 大平光代『だからあなたも生きぬいて』(講談社, 2000年)
- 河合隼雄『昔話と日本人の心』(岩波書店, 1982年)  
 —————『ユング心理学入門』(培風館, 1990年)  
 —————『とりかへばや 男と女』(新潮社, 1991年)  
 —————『昔話の深層』(福音館書店, 1977年)  
 —————『母性社会日本の病理』(中央公論, 1976年)
- 斎藤学『アダルト・チルドレンと家族』(学陽書房, 1996年)
- C.G.ユング『人間と象徴』河合隼雄監訳 (河出書房新社, 1994年)  
 —————『元型論』林道義訳 (紀伊国屋書店, 1990年)  
 —————『続・元型論』林道義訳 (紀伊国屋書店, 1990年)
- シルヴィア・B・ベレラ『神話にみる女性のイニシエーション』ユング心理学選書② 山中康裕監修 (創元社, 1998年)
- ジュディス・L・ハーマン『心的外傷と回復』中井久夫訳 (みすず書房, 1997年)
- ナサニエル・ホーソーン『緋文字』刈田元司訳 (旺文社, 1967年), 八木敏雄訳 (岩波文庫, 1992年)
- 林道義『ユング思想の真髄』(朝日新聞社, 1998年)
- 元田脩一『エデンの探求——アメリカ小説の一特質』(開文社, 1972年)
- 柳美里『命』(小学館, 2000年)  
 『ダンサー・イン・ザ・ダーク』(松竹株式会社事業部, 2000年)